

ウェブサイトと SNS で作るフランス文化の学びの場

釣 馨

TSURI Kaoru
Université de Kobe
QYI02471?nifty.com

フランス関連情報サイト FRENCH BLOOM NET を運営して 8 年余りが経つが、このサイトはフランス語学習者にフランス関連情報を提供し、自主的な学びの場を作るために始めたものである。さらにサイトと連動させる形で 2010 年 3 月からツイッターを始め、4 月末現在でフォロワー数は約 7500 人に達し、フランス語を学ぶ学生だけでなく、フランスに関心のある社会人の人たち、フランス在住の人たちなどと交流しながら、授業という制限のある時間、クラスや大学という閉じた場を超えた情報交換や気づきや学びの場を生んでいる。

2011 年に日本のツイッター Twitter 人口は 1500 万人に達したが、情報フィード型のメディアであるツイッターはフランスの文化的な情報の提供にも有効なのだろうか。またツイッターに一般的な教育効果があるとすれば、それはどのようなものだろうか。自らの運営上の体験やアクセス解析で得られたデータも踏まえて考えてみたい。

I. 情報のフラット化とフランス文化のキュレーション

ジャーナリストの佐々木俊尚は、ツイッターでフォローするということは、その人の視座に入ることだと言う。その人のツイートが自分のタイムラインに流れこんでくると、その人の視座で世界を見ることになる。それは情報そのものを得ることよりも、その人の情報のフィルタリングや情報への意味の付与の仕方を学ぶことになる。リテラシーを自分だけで鍛えるのは難しい。モデルとなる視座に自分を重ねて、それを真似ながら、ときには批判的に自分の視座を作り上げていく。このような視座を提供する人間を近年キュレーターと呼ばれている。

日本でキュレーターは博物館や美術館の学芸員の意味で使われている。芸術作品の情報を収集し、実際に作品を集め、一貫した何らかの意味を与えて企画展として

Rencontres Pédagogiques du Kansai 2012

成り立たせる仕事のことだ。これはノイズにまみれた情報の海から、ひとつのコンテキストに沿って情報を拾い上げ、SNS 上で流通させる行為と重なり合う。このようにキュレーションの価値が高まっているのは、情報が爆発している状況の中で、情報そのものと同じくらい、情報をフィルタリングすることが重要になっているからだ。先に述べた視座とは、その人固有の情報のフィルタリングの方法と言い換えることもできる。キュレーション・ジャーナリズムという言葉も使われており、1次情報の取材と同じくらいに、すでにある膨大な情報を仕分けして、それらの情報が持つ意味を分かりやすく読者に提示できる能力が求められている。

個人の視座が重要なのは、情報が増殖していると同時に、情報がフラット化したからである。もはや文学や芸術を頂点とするような文化的な階層があり、その体系の中で個々の作品が価値づけられるような形で文化は存在していない。すべてが情報として同じ平面状にある。ミシェル・ド・セルトーは『文化の政治学』の中で、1968年後の学生の文化的な状況は「書店を見ればわかる」と言った。「本屋の光景は学術書とポケット版が隣りあうような文化空間に呼応し、序列化ではなく、ひとつの表面をつくりなすマスカルチャーの表現になっている」と。今はインターネットを見ればわかる。68年以降の書店の状況がさらに徹底化され、すべてがフロー化し、フラット化しているので、検索エンジンや情報キュレーターの助けを借りて、私たちは自分のための情報の序列化を試み、自分なりの視座を構築せざるをえないのだ。かつては階層化された価値体系の伝達者が高い地位にあったが、情報がフラット化したことで、それを読み込む側に主導権が移ったとも言える。この「個人の読み込みモデル」はだいぶ前から言われているが（例えば、東浩紀が『動物化するポストモダン』で唱えるデータベースモデル）、ようやくそれが SNS などによって現実化してきたということだろうか。

階層化された文化の反映として、かつてフランス文化と言え、文学や思想と相場が決まっていた。また、これまでフランス語の学習が大学において主として文学と翻訳に偏っていたのは、既成の価値体系によって規定された一種の分業体制である。しかし、今はフランスから届く情報も、ネット上や学生のフランスに対する関心も多種多様としか言いようがない。それには欧米に追従する明治以来の「キャッチアップ」モデルが破綻したことも大きく影響している。もはやフランスはキャッチアップする目標ではなく、グローバル化で日本とフランスは豊かな伝統文化を持つが今は落ち目の国として同じような問題に直面している。学生のあいだでかつての教養語だったフランス語の受講者が減り、近隣の中国や韓国の言語への関心が高まっていることも欧米の相対化の表れである。またかつて日本の若者がフランスのハイカルチャーに憧れたように、今はフランスの若者が日本のサブカルチャーに強い関心を示している。さらに国家戦略的に仕掛けられた韓流文化がそこに割って入り、文化的なヘゲモニーも、その都度、フォーカスされるテーマも刻々と移り変わっている。

西垣通は『ウェブ社会をどう生きるか』の中で、従来の「教え込み型教育」を批

Rencontres Pédagogiques du Kansai 2012

判し、それに生物情報学をモデルにした「しみ込み型教育」を対置している。「教え込み型教育」とは、言語化された明示的な知識体系が前提となっていて、知識体系を細かい要素に分解し、綿密なカリキュラムにしたがって学習者の頭脳に注入していく教育である。まさに今の学校教育のモデルなのだが、一方、今の時代に適合する「しみ込み型教育」は、生物が環境とコミュニケーションしながら生きているように、もつれあい、波打っている情報の大海の中で、「今この時間に自分が生きる上でもっとも重要な情報を拾い出す能力」を身に付けさせる教育だという。世界がノイズの海となり、生物にとっての環境に似るのは世界がフラット化したからだ。「自分が生きる上で」と言われているように、情報の価値はあらかじめ決まっているのではなく、個人の置かれた条件やコンテキストに依存する。

生物モデルと言えば、佐々木俊尚もバイオホロニクス用語であるセマンティック・ボーダーに言及している。それは自己の意味的な境界である。生物は様々なボーダーを設け、自分だけのルールによって、同一性を保ちながら、外部から情報を取り入れる。一方、環境は刻々と変化するので、セマンティック・ボーダーは固定化されることはない。変化に応じて柔軟に組み替えられる必要がある。このモデルからは、キュレーターはセマンティック・ボーダーを組み替える人たちと再定義できる。ボーダーを再設定することでそこに新しい意味や価値が生み出される。

またキュレーション能力は、社会人や学生に求める新しい能力として経済団体連合会や文部科学省が定義しているものとも共通する。1996年に経済団体連合会が提出した「創造的な人材の育成に向けて一求められる教育改革と企業行動」の中には、「知識として与えられた解決策を機械的に適応するのではなく、既存の知識にとらわれない自由な発想により自力で解決する能力」が求められると書かれている。これと教育の領域において対応するのが、1996年の中央教育審議会の第1次答申に打ち出された「生きる力」である。「生きる力」もまた「単に過去の知識を記憶しているということではなく、初めて遭遇するような場面でも、自分で課題を見つけ、自ら考え、自ら問題を解決していく資質や能力である」と定義されている。つまり、大きな規範が失われあとに要請される、個人が手持ちのありあわせのリソースで問題解決をはかるブリコラージュ的な能力と言えるだろう。「生きる力」を保つために私たちは学び続けなければならない、変化の速い社会の中で、人生は再適応の連続となる。大学で学んだことが一生有効であることはなく、生涯教育が当たり前になる。これからは大学で学び直し、途中で職業訓練を受けるということが頻繁に起こるだろう。それは現代の生産のサイクルにおいて知識と情報の果たす役割が大きくなっているからであり、つまり情報の絶え間ない組み替えによって新しい価値を生み出す仕事主流になっているのである。

II. 語学学習とキュレーションの両輪

「情報が持つ意味を分かりやすく読者に提示する」というキュレーションは、もちろんフランス文化についても適用できる。「今この時間に自分が生きる上でもっ

Rencontres Pédagogiques du Kansai 2012

とも重要な情報を拾い出す能力」を伸ばし、「セマンティック・ボーダー」を自在に操り、個人の視座を鍛錬するための格好の題材となる。フランスというカテゴリーは、世界を考える上での、格好の足場となる、ちょうどよい規模の枠組みなのだ。かつての勢いはないにせよ、フランスは学生の関心をひきつけるブランド力も十分残している。また現在において若い世代で共有されているものはサブカルチャーであり、彼らのあいだにコモンセンスを育むとすれば、この分野をフランスに関わらせながら活用するしかない。サイトでも必然的にサブカルチャー批評が多くなっている。

図らずも当初から FRENCH BLOOM NET はフランス文化のキュレーション・サイトだったわけだが、始めたころは個人的にコーディネートという言葉を使っていた。フランス文化とサイトの読者のあいだを取り持つという意味である。ツイッターではフランスの政治経済のニュースや、映画や音楽などの文化情報を要約やコメントをつけて流しているのだが、それに加え、サイトの更新情報を流し、ニュースに関連する過去ログにリンクを貼ることで、ツイッターのフォロワーをブログへと誘導している。それは 140 字の短い文章から比較的長い論理的な文章への誘導でもある。教師がサイトや SNS を運営することは、自らがリテラシーのモデルを示すことに他ならないが、一方的な情報や視座の提供者という立場もありえない。教師が学生から学ぶこともあるだろうし、優れたキュレーターを探して謙虚に師と仰ぐことも必要だろう。

「価値あるものは放っておいても人は関心を持つ」という考えはもはや通用しない。価値があると思うことを人に伝えたいと思えば、適切なコーディネートや、関心や好奇心を持って人が集まるような場や仕組みを作ることが不可欠だ。普段私たちはある情報を前にしたとき、当然その内容に関心を向ける。しかし情報が乱立している状況では、まずその情報の存在を開示しなければならない。そのためには他者の視線の中に立ちあがることも、人目をひくような仕掛けを作ることにも必要だ。そのようなパフォーマンスな次元が情報の内容に先立つからだ。

フランス語学習のもうひとつの車輪として、多種多様なフランスの情報をキュレーションすることは実は理にかなっている。語学学習とは言語を駆使してどんな状況にも対処できるような柔軟性を獲得することだからだ。そもそも言語能力は「今ここで」どんなことにも対処できる一般的な知識や知性にかかわっている。なぜなら人間は言語によってあらゆることを語るのもあって、特定の分野に限定されるわけではない。もはや個人の役割が明確に細分化されず、一生続くような仕事を与えられないような、流動的で変化の速い社会に居合わせる私たちは、むき出しの世界に放り出された人間の原初の状態に似ている。あてにできるのは自分の言語能力とありあわせの一般的な知識と知性だけだ。そこからコミュニケーションの主体として立ち上がり、言葉によって人に働きかけ、キュレーションを通して情報に働きかけるしかない。

Rencontres Pédagogiques du Kansai 2012

参考文献

佐々木俊尚、『キュレーションの時代』、ちくま新書、2011年

西垣通、『ウェブ社会をどう生きるか』、岩波新書、2007年

ミシェル・ド・セルトー、『文化の政治学』、山田登世子訳、岩波書店、1999年

パオロ・ヴィルノ、『ポストフォーディズムの資本主義』、柱本元彦訳、人文書院、2008年